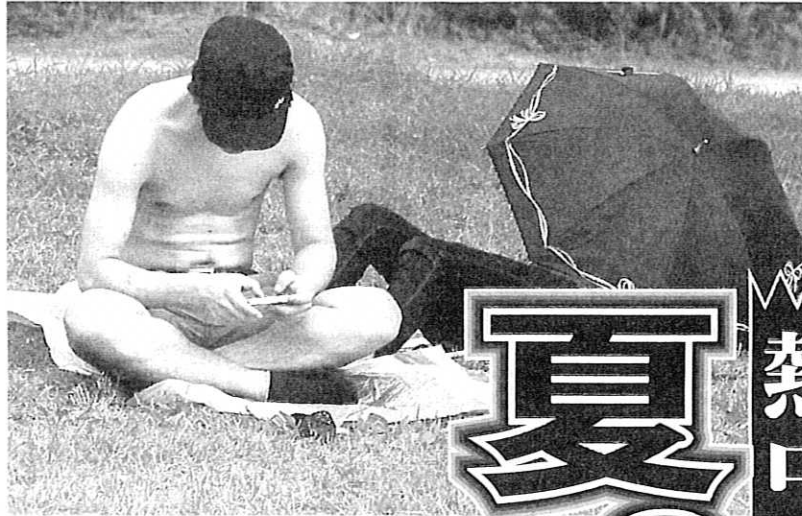


発汗 動悸 めまい…症状が重なる



強烈な日差しの下で動いていたら、大量の発汗とともにめまいを感じ、意識がもうろうとしてきた…。熱中症を疑う人がほとんどだろうが、実は「低血糖」を起こしていたというケースがある。勘違いして対処が遅れると、最悪の場合、命を失うような事態を招きかねない。

糖尿病で、普段から血をすするために河原に出か糖を下げるSU剤を飲んけた。炎天下であくせくしている40代のAさんは、家族揃ってバーベキュー

熱中症と勘違い

夏の低血糖は怖い

低血糖を起すと、ブドウ糖をエネルギーにしている脳の働きに支障を来し、意識を失って転倒したり、事故につながるリスクがアップする。また、低血糖になると交感神経が優位になって心臓に栄養を送っている冠動脈が収縮し、心筋梗塞や致死性の不整脈を起すこともわかっている。

「藤臓から血糖値を抑えるインスリンを分泌させているSU剤を服用していたり、インスリン注射を打っている患者さんは低血糖を起しやすいといえます。何種類かの薬を組み合わせさせて飲んでる人も、効果が強くなり過ぎる可能性があります。低血糖を起すタイミングは、薬を飲んでいるのに

機材や食材の準備をしていたら、大量の汗が噴き出し、動悸を感じて少しフラフラし始めた。Aさんは軽い熱中症だろうと思ひ込み、冷たい水を飲んで日陰に移動。休んでいるうちに顔面が蒼白になり、そのまま意識を失ってしまった。家族は慌てて救急車を呼び、担ぎ込まれた病院でAさんの血糖値は25mg/dlまで低下していることが判明。熱中症ではなく重症の低血糖だった。

「熱中症だと勘違いしていてもおかしくない状態だった。糖尿病専門医で「しんクリニック」院長の辛浩基氏は言う。「低血糖になると、大量の発汗、動悸、倦怠感、めまい、意識混濁といった症状が表れます。これは、熱中症の1度からII度で表れる症状と重なっている。低血糖の知識がそれほどない糖尿病の患者さんは、夏場にそうした症状が出ると勘違いしてしまうケースが少なくないのです。低血糖を起しているのに、軽い熱中症だから、涼しいところで休めば回復するだろうとそのまま放置していると、深刻な状況になりかねません」

「起す人もいます」暑さで日中に疲労感やめまいを覚えた糖尿病患者が、夜になっても食欲がなくて、夜になっても食欲

「糖尿病で投薬治療をしている患者さんは、低血糖を起すと熱中症と同じような症状が表れるということを覚えておく必要があります。そうした症状があるときは、熱中症だけでなく、低血糖も疑った方がいい。症状が軽い場合は、ひとまず糖分が含まれた飲み物を補給して改善するかどうかを確認し、医師に相談してください」

夏場、体調に異変を感じたら、熱中症を疑うべきなのは間違いない。それと同時に、低血糖の可能性があることも肝に銘じておきたい。

意識を失い命を落とすケースも